

グリム童話における「ほうちょうをもった手」の異質性

08K012 石橋千尋

はじめに

このレポートを作成するにあたり、私がグリム童話から選んだのは「ほうちょうをもった手」⁽¹⁾である。初版以降、削除されたこの話を選んだ理由は、一読した際に、あまりに短い話で「妖魔の立場や展開」にグリム的ではない、異質な感じがしたこと。そして「元になった話がスコットランドのものである」と書かれた註に目をひかれたことが始まりである。なぜ、「妖魔の立場や展開」にグリム童話として異質な感じがするのか、「元となったスコットランドの童話か民謡」とはどのようなものかを追ってみたいと思ったのがきっかけである。

この「ほうちょうをもった手」の「構成」や「登場するもの」、この話のキーワードと思われる「泥炭」、「恋人の妖魔」、そして「元になったスコットランドの童謡・民謡」について考察していく。

1. 構成

この話の構成は、娘と「恋人の妖魔」を描いた前半と、母親と兄弟側から描く後半に分かれる。

(1) 前半

3人の男兄弟ばかりを構う母親から碌に扱ってもらえない娘は、古くて役に立たない道具を一つ与えられただけで、泥炭掘りに行かされる。だが、娘には「恋人の妖魔」（助力者）がおり、奇妙な力を持つよく切れる包丁を借りて乗り切っていた。その包丁を返すためには、妖魔の住む岩を2度叩くことになっていた。

(2) 後半

母親は、いつも娘が楽々と泥炭を持ち帰ってくることに気づき、息子たちにそのことを話す。娘のあとをつけた3兄弟は、魔法の包丁を受け取るさまを見て、娘からそれを取り上げる。そしていつも娘がするように岩を叩き、出てきた魔物の手をその包丁で切り落とした。以後、娘に裏切られたと思った魔物は姿を現さなくなった。

グリム童話によく見られる3回の繰り返しがここでは、まったく見当たらない。初版以降に掲載されず、それ故に手が加えられていないためだろう。もしも、グリム兄弟がこの話を残していれば、娘が包丁を3回受け取る場面や、3兄弟が2回包丁を取り上げることに失敗する、などの場面が加えられたと思われる。これが、グリム童話の中で妙に異質な作品だと感じる理由の一つである。

2. 登場するもの

「ほうちょうをもった手」に登場する人物としては、娘、母親、3人の兄弟、娘の恋人の妖魔の6名がおり、小道具としては、泥炭と奇妙な力をもった包丁が出てくる。このうち、泥炭と妖魔については別の項目で後述するが、まず登場するものとして、娘、母親、3人の兄弟、として奇妙な力をもつ包丁について、少し詳しく見てみよう。

(1) 娘

「灰かぶり」の鳥たちの助力を得た灰かぶりなどと同じく、何らかの助力を得て、試練を乗り越える女主人公と見なすこともできる。煮たきなども彼女の仕事だったとすればであるが、あまりにも話が短いため、彼女がどのような立場にあるのか分かりにくい。

(2) 母親

実母、もしくは継母など、細かい記述はない。女主人公の娘より、3人の息子たちを偏愛している。もしも加筆されていれば、継母とされたタイプの母親である。

(3) 3人の兄弟

メルヘンにおいて特別な数字である「3」を持つのは、この兄弟だけである。3人の兄弟と1人の娘と言えば、「青ひげ」が想起されるが、あちらの3兄弟が「妹のために救出に来た」のに対し、ここでは「娘の助力のための手段を奪ってしまう」と態度が大きく違っている。

この兄弟たちはどちらかというと、「継母の意地悪な連れ子」に近い位置づけにある。

(4) 奇妙な力を持った（どんなものでも真っ二つに切れる）包丁

金属、中でも鉄は妖気や邪気を払う魔よけの効果があるとされる。ナイフなどを身につけていれば、妖精に誘い出されても安全であるとする伝承は多い。

おそらくこの包丁は、魔除けの効果もあり、どんなものも切ることができるために、妖魔の手もあっさり切り落とせたと考えられる。

3. 泥炭 (peat)

泥炭は低温と、ふつうは水没の結果として湿地の朽ちた植物が酸素不足のため、数千年にわたり分解し、堆積した土塊状のものである。ここで言う泥炭は、ピート・ボッグと呼ばれる泥炭湿原から切り出されたものだろう。スコットランドでも南東部のローランド地方では主に石炭が用いられてきた。泥炭を燃料として使用しているのは、ハイランド地方や島嶼地域、南部の高地、北東部などである。これを掘り出す作業は、「激しい労働を伴うため、昔ながらの協同の心意気が家族やコミュニティに存在する数軒の家族たちが1日に一家庭のためにピートの切り出しをして、次に別の家のために作業をする」⁽²⁾ のだという。この条件が存在しない——近所に別の家がない、又は家族の協力が得られないなどの——状況では、よほど辛い作業であったと推察される。生活に密着した集団作業の泥炭掘りを、たった一人でやらなければいけない娘はたいそう苦勞したことだろう。だがここから、話の舞台はこの泥炭地周辺地域に絞り込むことができる。

4. 恋人の妖魔

娘の恋人は「妖魔」とされているが、それはどのような存在であったのだろうか。日本語訳されたこの一単語だけではイメージが曖昧模糊としていたため、原文のドイツ語に当たってみた。すると、“Elfe (妖精・妖魔)” という単語が現れた。少なくとも、進んで人に危害を加え、悪事を働くような存在ではないようだ。だが、ドイツ語で“Elfe”と訳された、元のスコットランドの「妖魔」の姿はいまだ見えてこない。そこで、泥炭を燃料として使用する地域に絞り、その地の民話を読み集めてみたところ、ある「妖魔」が浮かんできた。

主に、スコットランド北部のオークニー諸島、シェトランド諸島に伝わる、妖精とも、妖魔とも、また妖怪ともいえる存在、トロウ (trow) である。綴りからも分かるように、この源流は北方よりもたらされた民話に見られるトルル (troll) にある。

オークニー、シェトランド両諸島には8世紀から10世紀にかけてヴァイキングが到来し、以後、15世紀半ばまでノルウェー領であったという歴史がある。18世紀までノルウェー語が飛び交っていたというので、大きな影響を受けていたと推察される。

トロウは元々、北欧の影響を受けた奇怪な姿の妖怪に近い存在だったが、次第に人に近い容姿に変化し、妖精と混同されるようになった。性質も妖精に近いものとされるようになり、気に入ったり好意を持った人間には手を貸したりするなど、どこかブラウニー的なところもある。この妖魔をトロウだと仮定すると、妖精と同様に丘陵に住み、太陽の光が届かない岩の住居から出てこないところから見て、陸生のランド・トロウに分類されるだろう。この地域の民話には、「人間と夫婦になって暮らすトロウ」もいくつか存在している。

以上から見ても、娘の恋人であった「妖魔」はオークニー諸島、シェトランド諸島の民話に残る「トロウ」であると考えてもいいだろう。

5. 元になったスコットランドの童話・民謡

残念ながら、「ほうちょうをもった手」の元になる話を見つけることはできなかった。泥炭の切り出しと、刃物で傷つけられる妖精が登場する点のみ、共通している話が一つだけオークニー諸島の民話にあったので、ここにその話の要約を紹介しよう。

メインランドのステンネスに、タミーという粉ひきが住んでいた。この男は、妖精を見ることができたという。彼は妖精を恐れはしなかったが、たった1度だけ妖精を恐ろしく感じたことがあった。ある霧の深い日、ピートの切り出しに行った帰りにタミーは見慣れた道で迷子になってしまった。気づくと、濃い霧の中あちらこちらに大勢の妖精がいるのを感じた。妖精たちに囲まれているのに怖くなった彼は、持っていたナイフで目の前の妖精を刺し、駆け出して何とか自宅にたどり着いた。しばらくして、別の男がそこに行くと、ナイフがピートに突き刺さっているのを見た。⁽³⁾

おわりに

グリム童話「ほうちょうをもった手」を、課題として調べることに決めた最初の頃は、まったく資料が集まらないこと、他の童話も同時に調べ、まとまらない場合はレポートを差し替える準備をしておくことも覚悟していた。手がかりは「スコットランドに元となる話があるらしい」だけであり、グリム童話との異質感はどこから来るのか、元になった話や「妖魔」は何ものかなど、疑問は山積みであった。

まず当たってみたのは、スコットランドの地質についてである。舞台となりうる地域をなるべく限定し、民話・伝承を調べていくという形をとった。そこで見つけた候補の妖精について、より深く調べていった。

終わりに、なぜこの話が初版以降にグリム童話から外されたのかを調べた。改編の手が加えられたとしても、残されていないのはなぜだろうか。初版から削られた話は、残酷であったためと聞かすが、この話は残酷さよりも、「トロウ」というドイツ語圏には当てはまらないものが登場しているためではないかと思われる。手を切り落とすという話ならば、「手なしむすめ」が残っているので、問題は「ほうちょうをもった手」がスコットランドの雰囲気を残した話であったためだろう。

「元になった民話、もしくは童謡」を見つけだすことはできなかったが、これからも機会があれば「ほうちょうをもった手」のルーツを探したい。

註

- (1) 「ほうちょうをもった手」、『完訳グリム童話集1』（金田鬼一訳）岩波文庫、1979年、104～105頁。
- (2) 木村正俊・中尾正史編『スコットランド文化事典』原書房、2006年、98頁。
- (3) 「ナイフを刺された妖精」、T.ミュア（東浦義雄・三村美智子訳）『人魚と結婚した男—オークニー諸島民話集—』あるば書房、2004年、173頁。

参考文献

- 『完訳グリム童話集1』（金田鬼一訳）岩波文庫、1979年
『完訳グリム童話集2』（金田鬼一訳）岩波文庫、1979年
木村正俊・中尾正史編『スコットランド文化事典』原書房、2006年
田辺裕監修『図説大百科世界の地理7 イギリス・アイルランド』朝倉書店、1998年、1002頁
国松浩二編者代表『独和大辞典〔第2版〕』小学館、1999年
T.ミュア（東浦義雄・三村美智子訳）『人魚と結婚した男—オークニー諸島民話集—』あるば書房、2004年
邸景一・三島叡・柳木昭信『旅名人ブックス58 スコットランド』日経BP企画、2003年
鈴木満『グリム童話』ナツメ社、2005年
「ほうちょうをもった手（原題:Die Hand mit dem Messer）」独語原文参考 http://de.wikisource.org/wiki/Die_Hand_mit_dem_Messer (2011年1月31日閲覧)

(担当教員 桑原 ヒサ子)